五十嵐岡山支店長の善処

「今朝、広島が爆撃され、市内はほとんど全滅、死傷者多数発生し大混乱」という広島被爆の情報が、岡山支店の五十嵐支店長の耳に入ったのは、当日の正午頃であった。しかし、このような情報では、広島支店の安否は全くわからない。広島との通信は朝方突然に不通となったまま、既に数時間途絶している。五十嵐支店長は急使の派遣を決意し、川崎政三が任命された。川崎が夜九時発の軍用列車に使乗し、広島の一つ手前の向洋駅に到着したのは翌日の午前三時頃で、そこから支店まで徒歩でたどりついたのは、朝五時半頃であった。高山営業課長は、川崎から聞いて、自分が船舶司令部に依頼した近隣店への連絡が届いていないことを知り、川崎にその報告連絡方を依頼した。川崎は、鉄道電話の通じている海田市駅（向洋駅の一つ岡山寄り）へすぐ引き返し、鉄道電話の借用を申し込んだが、通話が輻輳していて五時間ばかり待たされたあと、漸く正午頃、「支店長、調査役は相当重傷にて当分指揮困難なるも生命に別状なし……」という被災第一報を、岡山駅へ送ることができた。これが五十嵐岡山支店長に伝えられ、直ちに本店へ連絡された。この報を受けた本店首脳部の衝撃は大きかった。八月五日の前橋空襲の人命被害に続いて、六日の広島の大災害である。急遽、人命重視の総務部長電信が、各支店長あてに打電された。

「前橋支店五日夜、空襲ニヨリ営業所・役宅・寮舎全焼、金庫無事ノ見込。宿直員中脇田、刀根、滝沢、高野四名死亡。広島支店六日朝、少数機ノ来襲ニヨリ営業所半壊。大田次長行方不明、支店長、中尾調査役重傷、其他傷者多数ノ見込。敵ノ都市空襲ノ方法最近頓ニ酷烈ヲ加エ来レル実情ニ鑑ミ、

営業所金庫ノ防衛ニ当リテモ人命尊重ヲ特ニ考慮セラレ、情勢ヲヨク判断、適当ナル時期ニ避難スルヨウ御指導相成度。依命電報ス。総務部長」七日の夕方、財務局の斡旋により、吉川支店長、大田次長、中尾調査役等は専売局診療所へ移された。なお、この日、岡山支店では、広島支店の惨状が伝わると、五十嵐支店長が直ちに岡山医大に出向き、外科医二名の広島出張方を要請、快諾を得たので、夕刻六時の列車で、医師を伴い広島へ急行した。五十嵐岡山支店長の一行が向洋駅に到着したのは、七日の夜半であった。向洋から先は、広島まで徒歩で行かねばならなかった。一行は、深夜の街道を一列になって進んで行った。だんだん市内に近づくにつれて、光景はいよいよ悲惨であった。道端には死体が散乱しており、多数の負傷者が倒れていた。目標のない焦土の街で、何度も道に迷いながら、やっと八日午前二時に、広島支店に到着した。五十嵐岡山支店長は、朝まで支店で休んだあと、医師二名を同伴して、吉川支店長の収容されている専売局診療所を訪ねた。吉川は暑いので、芝生に横になって休んでいたが、五十嵐の顔を見ると、手を取り、涙を流して喜んだ。医師の準備が整い、吉川の頭に突き刺さっているガラスの破片を摘出することとなったが、麻酔薬がなかったので、手術中五十嵐は、吉川の身体が動かぬよう羽交い締めにして抱きしめていた。長さ六センチ余りのガラス片が取り出され、傷口を三針縫って手術は無事終了。そのあと大田次長、中尾調査役もそれぞれガラスの破片を摘出され、一応の手当が終わった。この日の朝、重傷の女子職員本田美保子が、怪我人を収容していた地下金庫前の廊下でついに息を引取った。さらに、宿直室入口近くの通路に積み重なっていた壁土やコンクリートの破片の下から、秦博、外和田今一の遺体が発見された。一方、この八日、支店営業場

に取引先の市中銀行を集め、午前十時半から共同で営業を開始した。店内に収容されていた負傷者も、五十嵐支店長が岡山から同行した医師により、やっと治療らしい治療を受けることができた。八日夕刻には、吉川支店長が専売局診療所から帰店した。その後十一日までに、本店（木下常雄、内田環、大野嘉造）、大阪（引地光治、山本芳三）、神戸（植田喜一）、門司（平山俊郎、傭員一名）の各店から来援があり、店内にも漸く生色がよみがえった。